

379 卵巣チョコレート嚢腫内容液中の Matrix metalloproteinase-3 (MMP-3)の測定と周 囲組織に及ぼす影響

札幌医大, 北見赤十字病院*

斉藤 豪, 黒木勝円*, 水元久修, 森 悟子,
藤井美穂, 工藤隆一

〔目的〕Matrix metalloproteinases(MMPs)は間質細胞より産生され周囲の結合組織を分解するが、これらの間質細胞はMMPsに拮抗する蛋白であるTissue inhibitors of metalloproteinases (TIMPs)も合成しており、MMPsとTIMPsのバランスが生体内における結合組織の破壊の程度を決定づける重要な因子となっていると考えられている。子宮内膜症の進展過程においてもこれらの蛋白が深く関与していると考え、その動態について検討することを目的とした。〔方法〕卵巣チョコレート嚢腫症例20例から嚢腫内容液を採取し、ELISA法およびwestern blot法によって嚢腫内にMMP-3の存在の有無を検討した。また、嚢腫組織を抗MMP-3及び抗TIMP-1抗体を用い免疫組織化学的に検討した。〔成績〕嚢腫内容液のwestern blot法ではほとんどの症例でMMP-3の陽性バンドを認めた。ELISA法でもwestern blot法と同様の結果が得られた。また、抗MMP-3抗体による免疫染色では症例による強弱は認めるものの、間質組織に陽性像を認めた。抗TIMP-1抗体による免疫染色でも間質組織に陽性像を認め、その染色態度はMMP-3と類似していた。しかし染色性はMMP-3と比較して一般に減弱していた。〔結論〕卵巣チョコレート嚢腫においては嚢腫組織のみならず、嚢腫内容液中にも蛋白分解酵素の一つであるMMP-3が存在することが明らかになった。このことは子宮内膜症組織から産生されたMMP-3が嚢腫内腔にプールされていると考えられる。子宮内膜症においては組織から直接産生されたMMP-3ばかりでなく、嚢腫内にプールされたMMP-3も相乗して、内膜症組織を認めない部分も含め、広範な組織破壊と癒着が引き起こされることが示唆された。

380 子宮腺筋症の治療法としてのDanazol 含有子宮内リングの検討

東京都済生会中央病院

玉岡有告, 亀井 清, 荘 隆一郎, 坂倉啓一

〔目的〕近年、子宮内膜症組織に対するDanazol (DZ)の直接作用が報告されている。そこで我々は子宮腺筋症症例に対し、DZ含有子宮内リング(D-IUD)を臨床応用し、IUDより放出されるDZの腺筋症組織に対する直接作用と臨床効果を検討した。〔方法〕子宮腺筋症7症例につき、患者の承諾を得て、五十嵐の方法に準じてD-IUDを製作し、治療に用いた。IUD装着期間は6カ月とし、装着前(0M)、6カ月装着後(6M)における症状、子宮容積、血清CA125値、肝機能(血清GOT, GPT値など)、血清E₂, FSH, LH値の推移を比較検討した。またDZの作用機序を検討するために、in vitroでIUDからの生食水中へのDZ放出試験を4週間行い、DZの経時的放出パターンをHPLCで測定した。さらに装着後患者希望により子宮全摘を行った1症例では腺筋症組織内DZ量を測定した。〔成績〕7症例の内、5症例において6M時月経痛などの主要症状は軽減し、1症例においてIUD抜去後妊娠が成立した。子宮容積は7症例全例において縮小傾向が認められ(M $\pm$ SD, 0M. 260 $\pm$ 131, 6M. 210 $\pm$ 94cm³)、血清CA125値も6症例において減少した(0M. 216 $\pm$ 215, 6M. 117 $\pm$ 126U/ml)。血清E₂, FSH, LH値は顕著な変化を示さなかった。肝機能も正常範囲内に推移した。放出試験では放出量は開始後4週間にわたり、約250 μ g/day/IUDで安定に推移し、6Mで抜去したIUDでもほぼ同量の安定した放出性を示した。D-IUD 1症例の腺筋症組織からはDZが検出され、その組織濃度は13.8 ng/gであった。〔結論〕D-IUDは、症状、各種検査所見の改善から、子宮腺筋症に有効である事が示唆され、その機序は、DZの腺筋症組織への浸透による直接作用と推察される。